

川の向こうのパン屋

放課後、あなたは数人の生徒を連れて、自転車で家路についた。
細い路地を抜けると、目の前にはほぼ垂直に見える坂が立ちはだかっている。
ペダルは重く、息は上がる。
それでもあなたは知っていた。——この坂を上れば、川が見えることを。
川面は夕日にきらめき、その先に小さな橋がかかっている。

ふと振り返ると、後方には道を間違えた子や、途中で立ち止まり動けなくなった子が見える。
声をかけたいが、あなたの足は止まらない。
先に進むことでしか、道を示せないと知っているからだ。

坂を越え、川沿いに歩くと、新しいパン屋がぽつんと立っていた。
木の看板には、まだ焼きたての香りがしみこんでいる。
種類は少なく、値段は少し高い。
けれど、不思議とあなたは手を伸ばしてしまう。
「ここでしか味わえないもの」が、まだ不完全な形のまま、ガラスケースに並んでいた。

袋を抱えて外に出ると、川の向こうで、遅れてきた生徒たちが手を振っていた。
パンの香りは風に乗って、坂を登ってくる者たちの鼻先へと届いていく。